INMP Newsletter No. 26

March 2019

International Network of Museums for Peace

編集：安斎育郎、山根和代

翻訳者：赤松敦子、寺沢京子、山本美穂子

オーストリアのセバスティアン・クルツ首相 広島平和記念資料館を訪問

オーストリアのセバスティアン・クルツ首相は、オーストリアと日本の国交樹立 150 年を祝して最近日本を訪問し、本人の要望により 2 月 16 日に、広島平和公園と広島平和記念資料館も訪問しました。当時外務大臣だったクルツ氏は、2017 年に国連総会により召集された会議において、7 月 7 日、核兵器禁止条約が採択されるまでの過程で、大きな影響を及ぼしていました。オーストリアはすでに同条約を批准しています。

原爆死没者のために花輪を献花するセバスティアン・クルツ首相（共同提供）

この条約を成立させることにつながった核兵器の非人道性についての国際会議が 3 回開催されましたが、その最後の会議は 2014 年 12 月にウィーンで開催されました。

平和記念資料館訪問に先立ち、クルツ首相は平和公園で原爆死没者慰霊碑に献花をしました。資料館では広島平和文化センターの小溝泰義理事長による説明を受けました。同センターは広島市から資料館の管理運営を受託している団体です。クルツ氏は山本定男氏にも会いました。山本氏は 14 歳の時に広島への原爆投下を目撃したことや、心に響くご自身の体験談を語られました。

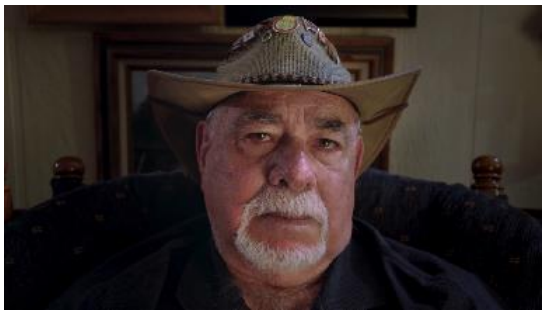
松井 一實広島市長と共に山本定男氏（左）の傍で証言を聞くクルツ首相（Bundeskanzleramt /Dragan Tatic 提供）

クルツ首相は松井一實広島市長からも市長の家族が原爆投下によりどのように影響を受けたかについて話を聞きました。訪問後クルツ首相は、世界から核兵器を廃絶するための決意を新たにしたと語りました。また、2017 年の条約の重要性をより多くの国々が認識するように援助し、その国々が条約に署名し、批准するよう奨励する決意を固めたとも語りました。クルツ首相の広島訪問に関してはジャパンタイムズ the Japan Times, NHK, 広島ピースメディアセンター Hiroshima Peace Media, 毎日新聞 Mainichi, とヴィエンナ・オンライン Vienna Online（ドイツ語）に記事があります。

（翻訳：赤松敦子）

『被爆兵士』—モーガン・クニッベによるドキュメンタリー映画

1945 年 8 月の原子爆弾による広島・長崎両市の破壊とその大勢の住民の殺戮は、原子爆弾使用が引き起こした最も重大で破滅的な結果でした。原爆投下後の生存者「被爆者」は、その重大な被害者でした。彼らは肉体的にも精神的にも深い傷を負い続けているのです。総じて、広島・長崎の被爆者ほど深刻ではなかったものの、1950 年代と 1960 年代に、核兵器開発がいくつかの州で進められ、その核実験を目撃した人々もそのような深い傷を抱えていたのです。優れた映画に送られる賞を受賞した若きドキュメンタリー映画監督であるオランダ人、モーガン・クニッベは、アメリカ合衆国内の核実験を目撃した被爆者が減少している中、その証言を集めました。その証言は聞く人を不安にさせるような内容でした。40 万人ものアメリカ陸軍・海軍兵士が 1946 年から 1962 年の間、核兵器実験場の近くで核爆発を目撃しました。当時、アメリカ合衆国は 200 回以上大気圏内核実験を実施していました。兵士たちは互いの間でも医者の診察を受ける時でも秘密を厳守することを誓うことを強制されていました。しかし沈黙を強制されて 40 年以上経って、勇気を持ってその深い心の傷となる体験について語る人も出てきました。当時は彼らは自分たちが（陸上でも海上でも）皮肉なことに、また残酷なことに核爆発の現場近くに配置されて、人体への放射能の影響を測定するために被曝させられた実験動物だったとは気づいていませんでした。



モーガン・クニッベによるインタビューに応じた被爆兵士の 1 人

モーガン・クニッベの新しい感動的なドキュメンタリー映画、『被爆兵士たち』は、多くのアメリカ合衆国の被爆した退役軍人へのインタビューを中心として取り上げています。そのインタビューでは被爆した元兵士たちが、しばしば怒り、苦しみながら核兵器実験場にいた時の経験について語っています。彼らはそれ以来毎日のようにその体験に苦しめられているのです。彼らは目がくらむような光のために自分の体の中の骨が見えたことや、息が詰まるような熱、彼らが立っていた塹壕が崩壊したことについて説明しています。彼らは、キノコ雲が広がっていくところやその目の覚めるような色を目撃し、その様子は今でも忘れられないと語っています。被爆兵士たちの多くは、一つまたは複数の病気にずっと苦しんでいます。退役してからずっと後に発病することもありますが、政府はその病気に対する責任を否定し続けています。

（編集者注）被爆兵士は「原子の兵隊」（アトミック・ソルジャー）と呼ばれることもあります。

クニッベは、「被爆兵士」たちの声をすくい上げ、彼らの体験が消えないようにすることを意図してこの映画を制作しました。またクニッベの同世代が、核戦争が人類に何をもたらすかということに対して感覚が麻痺して何も感じなくなっていることに気づき、この退役軍人の人々の話が核戦争の恐怖を理解するのを助け、私たちがその防止と核兵器廃絶のために行動することを促すということも信じていました。クニッベにとってこの退役軍人たちを知り、彼らの話を聞くことは決して忘れられない深い意味を持つ体験となりました。彼は、2 月 12 日にニューヨークタイムズのウェブサイトの意見投稿ページに掲載された記事でこのことについて書いています。その記事はこちらに掲載されています。here. このページから退役軍人の方々とのインタビューの映画から説得力のある 15 分の映像も見ることができます。

クニッベは VICE に勤務しています。VICE は世界最大の若者向けオンラインメディアです。2018 年 8 月に VICE はクニッベが製作したイギリスの被爆兵士についての短編ドキュメンタリー映画をそのサイトに掲載しました。2013 年に見積もられたデータによると、22500 人の退役軍人が 10 年続いたイギリスの大気圏内核実験に関わっており、その内 18500 人が亡くなり、そのほとんどが自然死ではなかったということです。10 万人近くの人々がこのビデオ this video の短縮 4 分版を見ました。このビデオはアメリカ軍被爆兵士についての映画と同様に深く心に残るものです。

こちらにより詳しい情報があります。this link

モーガン・クニッベ

アメリカ軍退役被爆兵士による当時の状況がよくわかる詳しい説明は、ジェシカ・レイノルズ・レンショーの素晴らしい書籍『レイノルズ家の人々・核時代・勇気ある木製の船』(2017 年　243～249 ページ)の「バッド・ファート氏と被爆兵士」の章にも掲載されています。「勇気ある木造の船」とは「広島の不死鳥号」と名付けられたヨットのことです。(2017 年 6 月発行のニューズレター19 号 8～9 ページの記事参照)こちら Click here で、その本の一部を読むことができます。その本の注文に関する情報も掲載されています。

（翻訳：赤松敦子）

軍縮と平和博物館の役割

ナグプールにあるノーモア・ヒロシマ・ノーモア・ナガサキ平和博物館、インド平和研究所、軍縮と環境保護という団体の館長であるバルクリシュナ・カーヴェイ博士は「行動への投資」と題したセミナーを開催しました。そのセミナーは 2018 年 12 月 20 日に南インド、アーンドラ・プラデーシュ州のネロールで行われました。このセミナーは、インド地雷・クラスター爆弾禁止キャンペーン（CBL）（カーヴェイ博士はその団体のコーディネーター）とインド赤十字の地元の委員会、ピナキニ・サティヤーグラハ・ガンジー・

アシュラム（ガンジーの生涯と非暴力主義による独立運動について学ぶ施設）を含む協力団体の援助により実現しました。

ネロールにあるガンジーのアシュラム（ネロールのラクシュマイア氏提供）

ネロールのパリパドゥ村にあるこの有名なアシュラムは 1921 年にガンジーによって開館式が行われました。このアシュラムはインドにあるガンジー・アシュラムの中でも最も重要な施設の一つです。インド赤十字と軍の代表者に加えて、地元の名士である医師、知識人、政治家の方々がこのセミナーに出席されました。バルクリシュナ博士は、小型軽量の武器が拡散している問題とそのインドへの影響、そしてインドとパキスタンの間の不信と誤解に基づいて配備されている核兵器による脅威の問題についてもこのセミナーで扱いました。博士は公教育、意識の向上、そしてインドとその他の国の平和博物館の重要な役割がこの件に関して必要であるということを強調しました。

ガンディー像に敬意を示す
バルクリシュナ・カーヴェイ博士

その他に、ガンジー・アシュラムの召集権者であるナラヤン・ムルティ氏、インド赤十字社社長アンナダータ・サブラマニアン氏、インド赤十字ネロール支部事務局長グドゥール・ラスミ氏、元国会議員ラマ・レディ氏ら著名な講師が講義をされました。

インド・パキスタン国境沿いの地域で女性と子供が地雷によって悲惨な被害を受けていることを、実際にそれを目撃した講師数人が特に強調していました。

しかし、国境から離れたほとんどの地域では、そのような悲劇が起きていることを知らない人が多く、講師たちは両国の政策立案者と政治家に破滅的な戦争の危険を最小限にするために、早急に両国間の関係を改善するように促しました。セミナーの参加者はインド政府に核兵器禁止条約にできるだけ早く調印するように促す決議案を採択しました。

ネロールのガンジー・アシュラムの前での
集合写真

バルクリシュナ博士はネロールのガンジー博物館を訪問した際に、ガンジーが日本に対し原爆が使用されたことを最初に聞いた時の反応はインド国内のいくつかのガンジー博物館で展示されるべきだと提案しました。ガンジーは、「世界が今、非暴力の理念を受け入れなければ、人類の自滅という結果を招くことになるでしょう。」と言ったの

です。そしてこのように問いかけました。「原爆はすべての暴力の無益さを証明したのではありませんか。」（1946 年 3 月 10 日　ガンジーが発行していた週刊ハリジャン誌掲載）

こちらに詳しい情報が掲載されています。go here また、ネロール地域のパリパドゥ村にあるピナキニ・サティヤーグラハ・アシュラムへの地元のレインボー・スクールという学校の遠足についての美しい色鮮やかな 15 分のドキュメンタリー映像がこちらで見られます。see here この映像では、児童と教員がアシュラムの前にあるガンジーの銅像に花輪を捧げる場面と博物館内の展示を案内してもらう場面を見ることができます。

（翻訳：赤松敦子）

オルダス・ハクスリー展：反戦博物館、ベルリン

ベルリンの反戦博物館の新しい展覧会は、イギリスの最も有名な小説家で、奇抜でディストピアな小説『すばらしい新世界』（1932 年）の著者、オルダス・ハクスリー（1894～1963 年）についてです。1930 年代、彼のいくつかの平和主義的な出版は、世間に広く知れ渡り、とりわけ『目的と手段』（1937 年）は影響を与えました。彼は平和誓約ユニオン（Peace Pledge Union、1934 年設立の英国の平和主義団体）を主導する人物で、ブッダやガンジーの教えに示されている東洋主義に多く影響を受けていました。

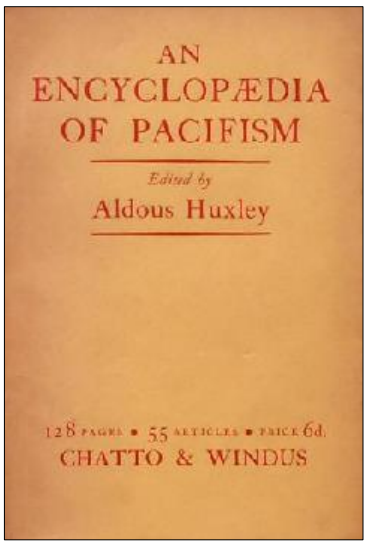
「平和のアルファベット―戦争反対への献身」という展覧会は、1 月 30 日から 4 月 30 日まで開かれています。54 の文字とイラストのパネルは（しばしば引用を通して）、ハクスリーのあまり知られていない平和主義の原点や本質へと奥深く導いてくれます。

オルダス・ハクスリー（GETTY 提供）

この展覧会のタイトルは、彼の 1937 年の著作『平和主義百科事典』をほのめかしています。展示パネルの半分は、『平和主義百科事典』を真似て A から Z まで、一つのパネルにつきアルファベット一文字を“平和のアルファベット”として展示しています。残り半分のパネルが表すのは、ハクスリーの写真、彼の平和に関連した著作物、戦争の惨事についてのゴヤの描写です。展覧会の観覧者は、ハクスリーの 1934 年 BBC での「戦争の原因」についての講義の録音と、ロシアの作曲家イーゴリ・ストラヴィンスキー作曲の「変奏曲―オルダス・ハクスリー追悼」（1963～1964 年）も聴くことができます。展覧会の全容は、以下からご覧になれます。

同市のガンディー・インフォメーション・センターは、ベルリン反戦博物館との共同で、2008 年から 2016 年の間に、平和教育と平和の歴史についての主要な貢献として、非暴力抵抗運動のコンセプトと実践についての 13 の展覧会を開催しました。これらの展覧会は、プレドラグ・チコバスキー（Predrag Cicovacki）& ケンディー・ヘス（Kendy Hess）編の出版『生き方としての非暴力：歴史、理論（学説）と実践』（Motilal Banarsidass 出版、デリー、2017 年第二号 514～532 頁）で、主催のクリスチャン・バルトフ、ドミニク・ミーチンによる、「非暴力抵抗運動の展覧会：平和教育への新しい方法」というタイトルの記

事で読むことができます。記事はこちらからもダウンロードできます。downloaded here.



オルダス・ハックスレー著
『平和主義百科事典』（1937 年）

（翻訳：山本美穂子）

“兵器のない勝利”展：ニュルンベルグ平和博物館、ドイツ

1 月 14 日から、ニュルンベルグ平和博物館の新しい展覧会「WoW—実兵力か、兵器のない勝利か」が始まりました。この巡回展は、5 年前に初めて開催され、ドイツ国内のさまざまな平和団体が展示したのと同様の展覧会を更に拡大し、より美しくバージョンアップした展覧会です。

さらに発展し刷新された展覧会は、世界中の紛争に対する非暴力介入のたくさんの成功例と方法を展示しています。多くの成功にも関わらず、これらの介入が広く知られることはなく、世間に知られないままとなっています。1999 年から、暴力紛争を防ぐため、または平和的解決の手助けのために、1300 名以上の関係者が（ドイツ国内だけで）60 か国以上の国々へ送られました。

この展覧会は、ニュルンベルグ平和博物館がドイツの NGO“非暴力連合”（‘Bund fuer Soziale Verteidigung’ (BSV, Federation for Social Defence) の協力を得て開催されています。詳細は、以下からご覧ください。

click here.

展覧会の共同開催者のロゴ

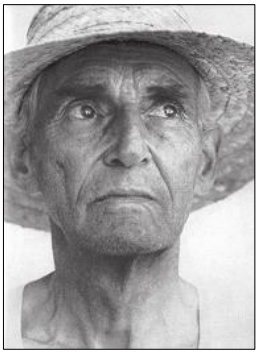
（翻訳：山本美穂子）

アーミン・T・ウェグナー展覧会：エーリヒ・マリア・レマルク平和センター、オスナブリュック、ドイツ

「アーミン・T・ウェグナー　—家と亡命」と名付けられたこの展覧会は、オスナブリュックにあるエーリヒ・マリア・レマルク平和センターで、1 月 24 日（～3 月 24 日）に始まりました。この展覧会は、2015 年に同センターで展示されたアーミン・T・ウェグナー協会による巡回展の最新のものです。

“家”という概念は、感情や、社会的、文化的なルーツという多くの意味を含んでいます。芸術家たちが迫害されて、自分の土地からの避難を強制されたとき、“家”と家そのものを失ったことは、しばしば彼らの重要なテーマとなっていきました。このマルチメディア展覧会は、ウェグナーの伝記と作品、また彼と同様の経験をした他のドイツ人作家たちの作品に表れる、これらの主題（“家”）に迫ります。2 月 17 日に開催された関連行事「木は枯れ、荒野の増幅―私たちはどこへ行けば？」は、20 世紀と 21 世紀における“家と亡命”の問題について、ディスカッションや講義、音楽を交えて開催されました。

アーミン・T・ウェグナー（1886～1978 年）は戦争に反対していましたが、衛生兵として第一次世界大戦に駆り出され、反戦の詩や散文を書きました。彼はオスマン帝国でのアルメニア人虐殺を目撃し、彼らを救うために勇敢にも努力を惜しみませんでした。1919 年には徴兵制反対連盟（Bund der Kriegsdienstgegner, the League of Draft Resisters）を設立し、その後ドイツ平和協会（Deutsche Friedensgesellschaft, the German Peace Society）のメンバーとして活躍しました。



アーミン・T・ウェグナー、伊ストロンボリ島にて、1964 年（ミシェル・ウェグナー提供）

1993 年、彼の著作や反軍事エッセイ、声明がナチにより燃やされ、彼自身も拷問されました。その後の人生を過ごすこととなった亡命先のイタリアで、彼は孤独とアイデンティティの崩壊に苦しみました。
今日、何百万という難民が戦争により家を追われ、徴兵され、人権侵害（貧困や飢餓、気候変動がもたらした問題）に直面しています。このテーマは、このように現在の重要な課題を扱っています。

詳細は、以下からご覧になれます。

click here.

（翻訳:山本美穂子）

「故郷とは？ 」
オスロ、平和の壁の展示

ノーベル平和センターとナショナル・ジオグラフィック協会は協力して、オスロのシティ・ホール広場のノーベル平和センター外側にある平和の壁で、展示を行いました。テーマは「故郷とは？」で、2018 年 5 月 3 日から始まり、2018 年 9 月にかけて催されました。故郷とは場所であると共に、感覚でもあります。故郷について考えるとき、若者は何を思うのでしょうか。ノルウェイやギリシャに住む若い難民や居住者は、ナショナル・ジオグラフィックの高名な写真家から、自分たちが故郷について語り、イメージを生み出すために、いかに写真を使えばよいかを学びました。2017 年に 6 か月にわたって、彼らはナショナル・ジオグラフィックのフォト・キャンプに参加しました。

キャンプのうち 3 つはノルウェイで、1 つはギリシャで行なわれました。これらのキャンプの目的は、新世代の作家や彼らの仕事を見るコミュニティーのメンバーを鼓舞することです。

オスロのノーベル平和センター
(Credit: Howard Davies / Alamy Stock Photo)

平和の壁は 60 メートルの長さの安全な壁で、ノルウェイの新国立博物館の建築現場を隠すために一時的に作られたものです。日々、何千もの人々の目に触れます。毎年、約 25 万の人々がノーベル平和センターを訪れるからです。センターの主導と市や当局の協力で、2015 年に壁は現代アートのための公共の場となりました。当初のアートは、地中海地方の難民危機に取り組む作品でした。その後、壁には 8 人の主唱者の巨大な写真が飾られました。

今年のノーベル平和賞の展示「戦場の実体」は、デニス・ムクウェゲさん、ナディア・ムラドさんに関するものです。二人は 2018 年 12 月 10 日に、そろってノーベル平和賞をオスロで受賞しました。展示では、世界のあらゆる戦争で、武力の一つとして性暴力がいつもあり、なお続いていることが示されています。

故郷とは？　平和の壁での展示
(Credit: dailyscandinavian.com)

写真家、クリスティナ・デ・ミデルさんは、コンゴ民主共和国でムクウェゲ医師が経営している病院において、彼や治療してきた何千人もの女性の内の幾人かを撮ってきました。ナディア・ムラドさんはイラクの少数民族、ヤズィーディー教徒で、性暴力や奴隷状態から生還した人ですが、自身の話とともに、まだ囚われている人たちを救ってほしいと、世界の指導者たちへの嘆願を表しています。展示は 12 月 12 日に始められ、2019 年 11 月 24 日まで行われています。

詳しい情報はこれらのサイトで。

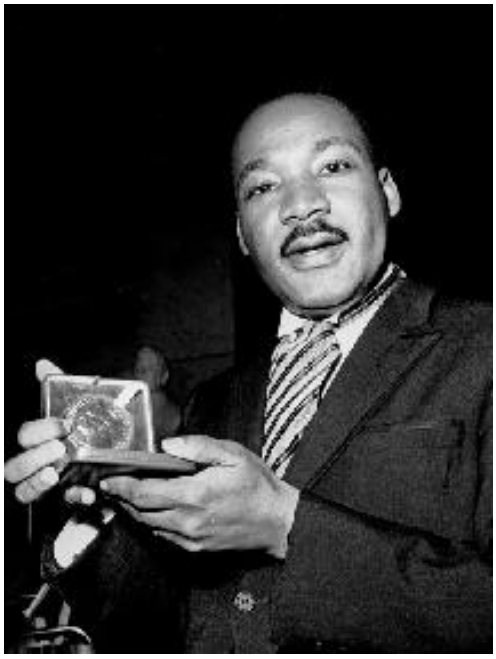
「故郷とは？」「ナショナル・ジオグラフィック協会」「ノルウェイ系アメリカ人」「戦場の実体」

（翻訳：寺沢京子）

自由への権利―マーティン・ルーサー・キング・ジュニア展
ストックホルムのノーベル賞博物館

ストックホルムのノーベル賞博物館では現在、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア展を開いています。2018 年 9 月 29 日に始

まり、2019 年 9 月 15 日まで継続する予定です。展示では、1950 年代～60 年代にかけて、アメリカのアフリカ系アメリカ人や貧しい人々の状況を改善するために、キング氏が全くの非暴力でいかに努力してきたかに光が当てられ、説明されています。アシュレイ・ウッズさんによって選定された展示は、8 つの部門に分けられていて、キング氏の生涯や活動が、大まかな年代順に、様々な側面から捉えられています。それらは同時に、様々な人権についての啓蒙でもあります。



(Credit: AP)

ノーベル平和賞のメダルを手にするマーティン・ルーサー・キング・ジュニア(1964 年 12 月 10 日)

展示の始まりに合わせて、アメリカの公民権運動家で、キング氏の親しい協力者であったジェシ・ジャクソンさんが、ストックホルムを 3 日間訪問しました。1 分半の短いけれども力強い映像で、彼はキング氏の実現した夢や、まだ困難な状況もあり、闘いは続いていることを語っています。展示会を訪れた様子も、このサイトで見ることができます。

(Credit: Ake Eson Lindman)
ストックホルムのノーベル賞博物館

1 月 1 日から、ストックホルムでのノーベル賞に関わる広範囲な活動が、ノーベル賞博物館という新たな名の下に集約されてきました。ノーベル博物館とノーベルセンターが一つになったのです。博物館は暫定的にストックホルムの旧市街の中心広場にあります。スウェーデンの首都の中心部に新しく大きな建物を造る企画は最近、環境的理由と新市議会議員選出で、中止になりました。博物館や展示に関する詳しい情報は、以下のサイトでご覧ください。

https://nobelprizemuseum.se/

https://nobelprizemuseum.se/a-right-to-freedom-martin-luther-king-jr/

https://nobelprizemuseum.se/about-us/about-the-nobel-center-on-the-blasieholmen-peninsula/

https://www.theguardian.com/world/2018/may/23/plans-100m-nobel-centre-blocked-by-swedish-court-stockholm

https://www.dezeen.com/2018/05/29/david-chipperfield-architects-disappointed-nobel-centre-blocked-by-court-stockholm/

（翻訳：寺沢京子）

ルーマニア平和博物館

このルーマニア平和博物館は、東南ヨーロッパの最初の平和博物館です。私たちの主な目的は、平和と平和教育のコンセプトに関する情報の広い普及と、地域や世界の紛争を理解し平和的に解決するためのツールや技術を伝えることにあります。

シブウ市のルーマニア平和博物館のディスプレイ

これらは、批判的に物事を捉える考え方や、共感、協力のためのスキルの形成や向上を扱っています。当平和博物館は 2018 年 1 月 19 日、2017 年のウィーン平和博物館（PMV）訪問で影響を受けたマグダレナ・クリスティナ・ブトゥッカによってヴルチャ市に誕生しました。ルーマニア平和博物館は、世界の平和博物館（特にウィーン平和博物館）と協力しています。

ルーマニア博物館のオープニングの後で、多くのボランティア活動や、小学生から中学生、高校生までの平和教育授業が行われました。

ブカレストのルーマニア国立図書館

これらのいくつかの活動には、ブカレストにあるアメリカ大使館やアメリカ国際教育協議会の協力がありました。国立大学や他の大学、教育機関が平和教育のプログラムを紹介することに賛同しました。ルーマニア平和博物館は、新しいコンセプトを象徴する移動博物館です。ルーマニア平和博物館の乗り物は、2018 年 10 月にシビウ市で、2018 年 11 月から翌 2019 年 1 月 8 日までは、アルバ・ユリア市に移動して展示されました。

講演を行うマグダレナ・ブトゥッカ

豊かな文化遺産を持つトランシルヴァニアの歴史的な 2 つの街の各県立図書館で、ルーマニア平和博物館の展覧会が開催されました。展覧会とワークショップは、地元や国立メディアで広く報道されました。4 月 15 日から 19 日までは、ブカレストのルーマニア国立図書館でも展覧会とワークショップが開催されました。

当平和博物館の最近の展覧会についてのメディア報道（ルーマニア語）と写真は、以下からご覧ください。click here and here.

（翻訳：山本美穂子）

国際平和主義ポスター記録センター：イタリア、ボローニャ近郊

1993 年、国際平和主義ポスター記録センター（C.D.M.P.I., the International Pacifist Poster Documentation Centre）が、イタリアのボローニャに設立されました。紡績工場として使われた建物を“平和の家”（‘Casa per la Pace “La Filanda”’, the House of Peace）として保存しているカザレッキオ・ディ・レーノという町（ボローニャ近郊）へ、2006 年にコレクションが寄付されました。C.D.M.P.I.（以下記録センター）はコレクションの運営を継続しています。記録センターの設立者ヴィットリオ・パロッティは、平和アーカイブが、2017 年にイタリア国立文化遺産省に歴史的価値を認められた著作、書類、DVD 等で構成されているとも報告しています。ここ数年、センターは「平和の小道」（‘Percorsi di Pace’（Paths of Peace）という団体と協力して、ポスターのスキャンに取り組んでいます。

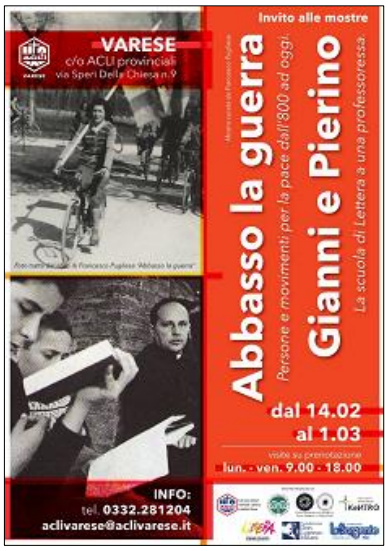
ポスターに取り組む“レオナルド・ダ・ヴィンチ”学校の学生たち

たくさんのポスターは、パロッティとフランチェスコ・プーリアによって「平和ポスターは語る―戦争をしないための多くの方法を」という分厚い本で紹介されています。（この出版についての詳細やイタリア語での原本は、INMP ニュースレター第 10 号（2015 年 3 月）6～7 頁と、同第 15 号（2016 年 6 月）14 頁をご覧ください。）

2017 年以降、コレクションの一部のポスターは、街の月刊誌や「平和の小道」団体のニュースレターでも、コメントとともに出版されています。2018 年、記録センターは移民とナイジェリアとビアフラ戦争（ナイジェリア紛争、1967～1970 年）のポスター展を開催しました。また、3 つのテーマを基にしたポスター展も、ベンティヴォリオ（Bentivoglio）とバラセラ（Baricella）というボローニャの都市部の町の協力を得て行いました。コレクションへの最近の訪問者は、INMP 運営委員、イラッチェ・モモイショ（Iratxe Momoitio）、ロイ・タマシロ、ジョイス・アスペル（2016 年の平和博物館を紹介する著作で、広範囲に及ぶ記録センターの説明や分析がされています。以下の新刊案内もご覧ください。）

ゲルニカ平和博物館の館長イラッチェ・モモイショの側に立つフィオレッラとヴィットリオ・パロッティ、2018 年 11 月

フランチェスコ・プーリア監修の、「*Abbasso la Guerra* 展」（戦争をぶっつぶせ—19 世紀から今日までの人と平和のための運動）が、ヴァレーゼで 2 月 14 日から 3 月 3 日まで開催されました。



Abbasso la Guerra 展

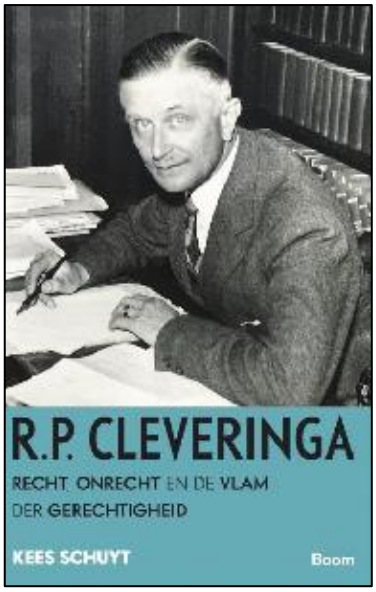
（翻訳：山本美穂子）

オランダのライデン大学でのルドルフ・クレヴェリンガ展

第二次世界大戦中に、占領下の国々の国民はしばしば困難な決断に直面しました。それは（他者に危害を及ぼすことになる）指示に従うか、（死刑をも含む懲罰の危険に晒されても）指示に従わず抵抗するかという選択をする決断でした。この問題は、ナチがユダヤ人市民に対する差別政策を採ったので特に深刻で広範囲に広がっていました。当時ユダヤ人市民は逮捕、強制収容所への移送、虐殺に直面していました。国が戦争に負けて占領下に置かれても英雄的に行動することはまだ可能でした。ナチ占領軍がすべてのオランダの大学にユダヤ人教職員を追放するように命令したとき、ライデン大学の著名な法学者（専門は海事法）であったルドルフ・クレヴェリンガ教授（1894 年−1980 年）は公の場で初めて抗議を表明しました。1940 年 11 月 26 日のその時の演説は今では伝説となっています。その演説の原稿には同僚の法学部の教授陣が実質的には全員賛成していました。クレヴェリンガ教授は演説の翌日逮捕され、シェヴェニンゲン（ハーグの海沿いのリゾート地）の牢獄に送られました。この演説を受けて、教授を支援する学生達はストライキをしましたが、その後ナチはこの大学を閉鎖してしまいました。

マルテン・ファン・ハルテン学芸員が旧大学図書館での展示を企画しました。（モニーク・ショー提供）

クレヴェリンガ教授は 1944 年にも逮捕され、オランダ人用強制収容所に監禁されました。収容所から解放されてからは抵抗運動の地下組織に参加しました。戦後、彼の勇気ある堂々とした抗議を、毎年その記念日に多くの人が思い出し記憶を新たにしてきました。ライデン大学は任期1年のクレヴェリンガの名を冠した輪番制の役職も設け、その担当者は第 2 次世界大戦か法と自由と責任に関する問題に焦点を当てた研究をしています。



R. クレヴェリンガの伝記「司法、不正、正義の炎」の表紙

1 月 16 日から 3 月 30 日までライデン大学旧図書館において「ルドルフ・クレヴェリンガ教授の足跡を辿って」と題した移動展示が開催されています。この展示は歴史家であるマルテン・ファン・ハルテンによって精選された展示で、彼は以前 EU の援助を受けて「平和発見」プロジェクトによるハーグの平和の道を作ることにも関わりました。(INMP によって 2014 年にこの記事が紹介されています。)彼は INMP の事務局がハーグにあった時に INMP の歴史学顧問を務めていました。クレヴェリンガ展の公開と同時にキース・スハイトによるクレヴェリンガの最初の伝記の紹介が入念に準備された感動的な式典の中で行われました。この式典にはクレヴェリンガ教授の娘さん、ライデン大学学長、同大学法学部学部長などの来賓も出席されました。この書籍の英語の訳書の出版も計画されています。この書籍では、クレヴェリンガが彼の人生を通してどのように自由・正義・真実という価値観に導かれていたか、そして彼と同じく勇気ある同僚たちが彼らの取った立場のためにどんなに苦しんだかを文書で証明しています。こちら here でこの伝記を書いたキース・スハイトへのインタビューを見ることができます。

この展示についての情報についてはこちら click here、書籍紹介についてはこちら here をご覧ください。

（翻訳：赤松敦子）

ロンドンでのネルソン・マンデラ展

2018 年にロンドンのサウスバンクで開催されたネルソン・マンデラ生誕 100 年記念の大規模展示（2018 年 9 月発行の INMP ニューズレター第 24 号 8～9 ページ参照）に続いて、またもう一つの展示が同じ地域で開催されています。「ネルソン・マンデラ」というタイトルで開催されるこの公式展示は、リーク・ストリート・26 番地・ギャラリーで 2 月 8 日に公開が始まり、6 月 2 日まで続く予定です。このギャラリーは鉄道のウォータールー駅のガード下を改造して作られています。

この感動を呼ぶ大規模展示は、ロンドンの次はパリで開催され、その後世界中を巡回します。世界中を回った後で最後にムヴェゾにあるマンデラの生誕地で常設展示になる予定です。

この展示は、マンデラの遺族の支援と協力により、マンデラに関する遺物と個人所有物 150 点を含んでおり、マンデラの年長の孫であるンコジ・ツゥエリヴェリレ・マンデラ族長が共同学芸員を務めています。他にもマンデラの大

統領時代に個人的な秘書としても大統領秘書官としても長期間務めたゼルダ・ラ・グランジも協力しています。グランジは「国を癒す」のセクションに貢献しました。マンデラがローベン島で囚人だった時に看守を務めていて、後に生涯の友人となったクリスト・ブラントは「1 万日：牢獄時代(1964 年-1990 年)」のセクションに展示品とその識見による解説を寄せています。（この記事の次に関連記事があります。）

（翻訳：赤松敦子）

ローベン島をクリスト・ブラントと訪れる

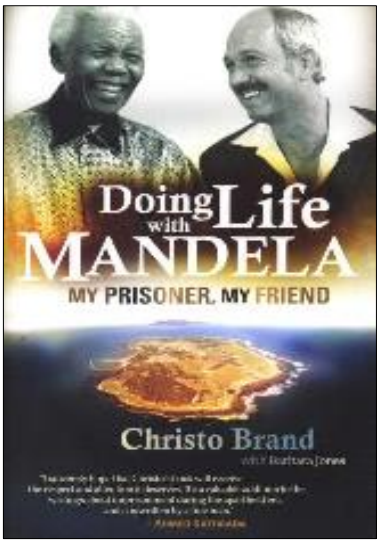
ここでは、何十年も続いたアパルトヘイトの間、人々を分離するのに使われた印などの差別と抑圧の象徴や、反アパルトヘイトの抗議運動を抑圧しようとする治安部隊の残忍性を示す未公開の写真やその他の画像や映像なども展示されています。来館者はまず子ども時代のマンデラに出会い、それから、後に世界的に認められた反アパルトヘイトの苦闘を象徴する顔となり、南アフリカの最初の黒人大統領となる彼の長い旅を、彼の生涯のそれぞれの段階がどのように形作っていったのかを目撃することになります。マルチメディアによる体験型展示では、彼がどのように、またなぜ暴力的な対立よりも和解の道を歩むことを選んだのかを探求することができます。

「イギリスでの反アパルトヘイト運動」と題された奥まった部屋での特別展示は、アパルトヘイトに反対する運動に参加したイギリスの活動家、労働組合主義者、当時第一線で活躍していた政治家、音楽家、著名人や一般大衆によるこの運動への貢献を記録しています。

またこの展示は、国際社会に正義・平和・人権の価値観と道義を支持する行動を取るように呼び掛けることも意図しています。ネルソン・マンデラはそれらのために戦う最高の闘士でした。彼の価値観とよりよい世界を作るという揺らぐことのない信念は彼が生きていた頃と変わらず今日においても同じように極めて重要なものです。

より詳しい情報については、こちらのリンク at this link から広範囲にわたる情報が集められた素晴らしいウェブサイトをご覧ください。ガーディアン紙 Guardian とベルファスト・テレグラフ紙 Belfast Telegraph にもより多くの情報が掲載されています。

クリスト・ブラントは以前南アフリカの牢獄の監守をしていました。彼は当時世界で最も有名な政治犯だったネルソン・マンデラを監視する責任を負っていた数人の監守の 1 人でした。ブラントは住み込みの監守としての彼の初めての仕事のために 1978 年にローベン島に来ました。当時ブラントは 19 歳、マンデラは 60 歳でした。それは 40 年にわたるその島での仕事の始まりであり、ネルソン・マンデラとの人間関係の始まりでした。そして南アフリカの前大統領マンデラが亡くなるまでその関係は続きました。二人の関係は信頼とお互いへの尊敬に基づく親密な友情へと発展しました。後に、今は囚人がいなくなったその島が人気のある観光地になったとき、ブラントはローベン島の博物館にある記念品・書籍売店の管理者として任命されました。



2014 年に出版されたブラントの回想録『マンデラと人生を過ごす:私の囚人、私の友人』

2018 年、彼は新しい仕事にフルタイムで取り組むために、ローベン島での仕事を退職しました。彼は体験を語る証言者となり、ローベン島でマンデラの足跡を辿る個人旅行向けツアーも提供しています。短編のビデオをこちらで見ることができます。Click here

こちらでガーディアン紙の記事を読むことができます。Guardian

（翻訳:赤松敦子）

リバプールの
ネルソン・マンデラ記念館

ロンドンでネルソン・マンデラ展（上記の記事参照）が開催されて数日後にネルソン・マンデラの家族である彼の長女マカジウェ（マキ）と孫娘トゥクウィニがリバプールのトックステス地区のプリンシズ・パークにある記念館設立予定地での公式の式典に出席しました。

その記念館は湖にかかる「自由の橋」、展示館、感動的なネルソン・マンデラの名言が刻まれた 32 の円筒形の石碑からなっています。

1994 年にマンデラはリバプールから名誉市民権を与えられました。リバプールは南アフリカと長く友好関係を保ち、その地域社会は不正とアパルトヘイトに反対する運動を展開し、南アフリカに寄り添ってきました。マンデラが 2013 年に亡くなって以来、地元のマンデラ8というグループは常設の記念館を設立するよう運動をしてきました。そしてその運動はマンデラの遺族から賛同を得ました。

リバプールのプリンシズ・パークでのマカジウェとトゥクウィニ・マンデラ(左)と地元の学校の児童たち(リサ・マリー・ラントとマンデラ8提供)

この訪問はリバプール市議会との協力で手配され、労働組合会議による記念館設立のための募金集めの行事も訪問日程に含まれていました。

プリンシズ・パークでのマカジウェとトゥクウィニ（マンデラ8提供）

より詳しい情報については、こちら here からパンフレットがダウンロードできます。また、こちらのリンク go here、here、here もご覧ください。

（翻訳 ：赤松敦子）

エジンバラでの反戦記念碑設立

戦争と戦士のための記念碑や記念館が沢山あることはよく知られていますが、戦争への抵抗や戦争に反対した人々のための記念碑や記念館はほとんどありません。スコットランドの首都エジンバラには 37 の戦争記念碑がありますが、戦争への抵抗についての記念碑は公の場所ではほとんど見られることはありません。第一次世界大戦の間におよそ 1500 人が良心的兵役拒否(COs)をしましたが、その人々の多くは投獄されました。グラスゴーでは 8 万人が反戦デモに参加しました。反戦運動家たちは「女性の平和改革運動」を組織し、クリスタル・マクミランら女性たちは 1915 年にハーグで開催された国際女性会議に集結し、戦争を終わらせるよう要求しました。

エジンバラ平和と正義センターが主導し、スコットランドのエジンバラとイギリスの団体から成る協会が反戦記念碑建立に乗り出し、その必要性を訴えました。その記念碑は、過去と今日の良心的兵役拒否者とその他の戦争に反対を表明した人々、そして平和運動家を褒めたたえ、記念するものです。

記念碑のデザインは公募され、エジンバラ在住の芸術家ケイト・イヴによる平和の木の銅像のデザインが採用されました。この記念碑はエジンバラ市のプリンセス・ストリート・ガーデンに設置される予定です。この場所は世界遺産に指定されており、何百万もの人々が訪れる所で、8 つの戦争記念碑もあります。エジンバラ市はその庭園の中央部にその記念碑を建立することを許可しました。2019 年 8 月に除幕式を行うことが計画されています。第一次世界大戦の良心的兵役拒否者が牢獄から解放されてから 100 年目の記念日に除幕式を行う予定です。平和の木の銅像の 237 枚の葉は地元の良心的兵役拒否者を表しています。今日平和のために活動している様々な団体のロゴマークもその銅像のデザインに組み入れられています。記念碑建立のための募金運動目標額は見積もられている費用、およそ 17 万ユーロで、現在も募金活動が続いています。スコットランド議会と政府もこのプロジェクトに賛同を表明しています。こちら this link とこちら here に、より詳しい情報が掲載されています。素晴らしい、有益な 4 分間のビデオもこちらで見られます。here

（翻訳：赤松敦子）

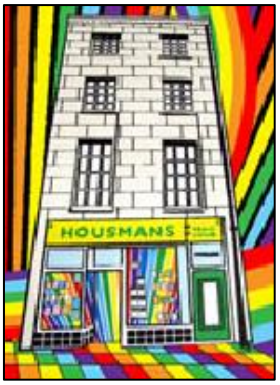
ロンドン中心部の平和の家 創立 60 周年

年に 1 度発行されるハウスマンズ・ピース・ダイアリーのことをよくご存じの読者の方もいらっしゃるでしょう。この本には世界平和団体住所録も掲載されています。この本が最初に出版されたのは 1954 年で、世界中の平和運動家にとって参考資料となり、更に平和のために働くための励ましとなることを意図しています。この便利なポケットサイズの本にはカレンダーがついており、毎週心を打つ名言が紹介されています。また、人物や出来事の記念すべき日、祝うべきまたは抗議すべき日も紹介されています。

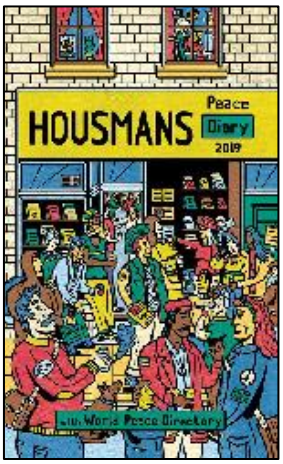
2019 年版の住所氏名録は国内外の 1400 以上の様々な平和運動団体の情報を広く集めており、特に草の根の平和運動をしている団体や NGO に重点を置いて、その住所や連絡先を掲載しています。

芸術家ケイト・イヴと平和の木の模型

アルファベット順になっている国際団体のリストの後には、アフガニスタンからジンバブエまで国ごとの（その国内で活動している）平和・人権・環境団体のリストがついています。これほど平和運動に役に立ち、これほど長期間、出版を継続してきた歴史を持つ参考資料は他にないでしょう。2019 年版（第 66 号）では 1959 年にロンドン中心部に『ピース・ニュース』というイギリスの平和主義者のための主要な雑誌や、ハウスマンズ書店とその『ピース・ダイアリー＜平和の日記＞』のような様々な平和団体や出版物の本拠地が開設されたことを祝っています。その後、カレドニアン通り 5 番にはピース・ハウスが創立され、鉄道の主要駅であるセント・パンクラス駅とキングズ・クロス駅にはいくつかの平和団体の本部が置かれました。その中には平和と非暴力革命の主張のために働く環境団体、人権と動物の権利のための団体があり、また、ロンドン核兵器廃絶運動(London CND)や、反武器貿易運動(AAT)、パックス・クリスティ（カトリック系国際平和運動）、ピース・ブリゲイズ・インターナショナル（非暴力の紛争解決を目指す国際人権・平和運動団体）も含まれています。



今年の巻頭特集記事「カレドニアン通り 5 番での 60 年」ではピース・ハウスと多くの団体、運動の起源と発展、それに賛同する個人の素晴らしい話が紹介されています。1959 年に、ピース・ハウスは遺産の寄贈のおかげで、『ピース・ニュース』の編集出版の本拠地として創立されました。（『ピース・ニュース』は 1936 年に創刊され、創刊後まもなくピース・プレッジ・ユニオン(PPU)＜平和の誓約連合＞という平和運動団体の機関紙になりました。）そしてハウスマンズ書店が印刷機材を共有する形でピース・ハウス内に創立されました。ハウスマンズ書店はカレドニアン通り 5 番に来る前は、最初は PPU 書店という名前で、こちらも 1936 年に開店していました。1945 年には PPU の発起人で平和主義の著作があるローレンス・ハウスマンにちなんでハウスマンズ書店と名付けられました。



ロンドンには今のところまだ平和博物館がありませんが、少なくともこの建物は質素で

はありますが、内容の豊かなピース・ハウスがあります。これは帝国戦争博物館(IWM)とは対照的な存在です。どちらにもそれぞれ書籍と記念品売り場があるのですが、ピース・ハウスはこれ以上ないというくらい素晴らしい内容の品揃えです。ピース・ダイアリーが世界中で販売されるようになったことで、ハウスマンズの名前は平和運動の中で国際的に知られるようになり、平和関係の希少な出版物を探しに、海外から来店される方もおられます。この店はバッジやカード、ポスターなど、平和運動関係の小物も数多く販売しています。IWM での展示の多くは、戦争や戦闘に関連する出来事を記念するか、祝うものですが、一方ピース・ハウスから発行される出版物（特にダイアリー）は、暴力的紛争の防止と廃絶のために働く個人や運動を思い起こし、祝うものです。平和を愛する人々にとってもう一つ、豊かな参考資料になるのは近隣のフレンズ・ハウスの中にある書店です。フレンズ・ハウスとは「ソサイエティ・オブ・フレンズ」（クェーカー教徒の団体）の立派な本部の建物です。

こちらのウェブサイトに更に詳しい情報があります。website　ダイアリーは 5 Caledonian Road, Kings Cross, London N1 9DX, UK にあるハウスマンズ書店（Housmans）で注文できます。注文のための連絡先メールアドレスは、diary@housmans.com　です。価格は送料別で£ 8.95 です。

（翻訳：赤松敦子）

南京虐殺記念館と立命館大学
国際平和ミュージアムが 2 月に対話

2019 年 2 月 20 日、立命館大学国際平和ミュージアムで、南京虐殺記念館の張建軍館長と、国際平和ミュージアムの安斎育郎名誉館長が対話する機会がありました。

良く知られているように、1937 年 12 月に日本軍は南京において虐殺や反人権的行為を働きました。この事件を記念するため、中国は 1980 年代に「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館」という正式名称のいわゆる「南京虐殺記念館」を開設しました。

国際平和ミュージアムは 2004 年に南京虐殺記念館の朱成山館長との間で協力協定を締結し、その後、互いが開催するシンポジウムに館長を相互招請するなど、協定を実践する努力が払われました。

2004 年には国際平和ミュージアムは初めてのアジア平和博物館会議を立命館大学で開始し、朱成山館長やベトナムや韓国の平和博物館関係者の出席を得ました。

また、2007 年に南京虐殺記念館が開いた「南京事件 70 周年記念学術シンポジウム」には安斎博士が招待されました。このように、協力協定は両博物館の橋渡しの上でそれなりの役割を果たしてきました。
2014 年に南京虐殺記念館の新館長に就任した張建軍館長は今回国際平和ミュージアムを初めて訪問し、安斎育郎名誉館長と 2004 年の協力協定を踏まえて今後どのように協力関係を発展させるかについて話し合いました。張館長はとりわけ平和研究面での協力関係の発展について強調しました。

前列左より、山根和代（INMP）、張建軍（南京虐殺記念館）、安斎育郎（INMP）、清水郁子（国際平和ミュージアム課長）

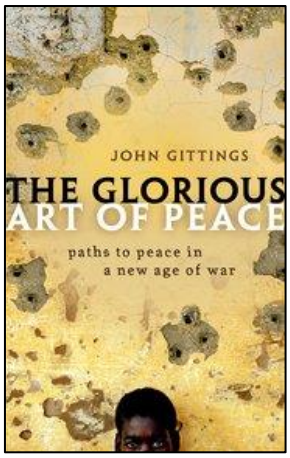
2 月 20 日～24 日、「第 3 回日中平和学対話」が大阪で開催されましたが、これは、立命館大学国際地域研究所、日本平和学

会、チャハル研究所（中国の外交政治問題に関するシンクタンク）、南京大学平和学ユネスコ・チェア、および、南京虐殺歴史・国際平和研究所の共催によるものです。安斎博士は同対話参加者に対してランチタイム・スピーチを行なう機会がありましたが、同博士は、「侵略者」と「犠牲者」という関係にある両国の平和博物館関係者が、未来における和解の心の発展に向けて考えるべき平和博物館研究上の諸問題について提起しました。
彼は、また、INMP の活動とりわけ 2020 年 9 月中旬に日本での開催が予定されている第 10 回国際平和博物館会議について紹介し、参加を強く呼びかけました。

新刊案内

1)ジョイス・アプセルの『平和博物館紹介』がペーパーバックでも出版されました。この新版もハードカバーも両方現在割引価格となっています。

2)平和と国際的な平和運動の歴史に関するジョン・ジッティングズの『平和の栄誉ある技巧』(2012 年)は素晴らしい書籍です。この書籍がペーパーバックでも購入できるようになりました。その新版には、書名に新しい副題『戦争の新しい時代における平和への道』が付け加えられ、序文にも新規に文章が追加されました。（オックスフォード：オックスフォード大学出版局、2018）



3)世界法廷プロジェクト(WCP)に関する重要な書類やその他の多くのデータを掲載した広範で優秀な資料が最近、ネット上で閲覧できるようになりました。

マオリ語で「白く長い雲のたなびく地」ニュージーランドのクライストチャーチにある軍縮安全保障センターのロゴマーク

この資料公開が実現したのは、アオテアロア「白く長い雲のたなびく地」ニュージーランドのクライストチャーチにある軍縮安全保障センター(DSC)館長であるケイト・デュースとロバート・グリーンの努力のおかげです。WCP は国際的な草の根運動で、いくつかの NGO の連合体によって運営されています。この団体は、核兵器の合法性（違法性）に関する勧告的意見を、国連の要請によって、ハーグにある国連の国際司法裁判所に付託することに成功しました。

ICJ は 1966 年に核兵器による威嚇またはその使用の一般的違法性について結論を

下しました。そして、核兵器保有国側に核兵器廃絶という結果をもたらす交渉をまとめる義務があると断言しました。このことは核兵器廃絶のための苦闘の歴史の中で画期的な出来事とみなされています。

WCP は「白く長い雲のたなびく地」ニュージーランドで 1980 年代後半に始まり、その後の 10 年間国際的な運動が続く間、この国の独立した団体である平和財団が WCP の主要な役割を果たしました。1998 年には軍縮安全保障センター(DSC)が「相互安全保障を促進すること」を目的としてその財団の中の専門家センターとして設立されました。2004 年には DSC は独立した団体となりました。DSC の論文は、11 のカテゴリーに分けられており、その完全で詳細なリストはこちらのリンク this link から見ることができます。

2014 年に南京虐殺記念館の新館長に就任した張建軍館長は今回国際平和ミュージアムを初めて訪問し、安斎育郎名誉館長と 2004 年の協力協定を踏まえて今後どのように協力関係を発展させるかについて話し合いました。張館長はとりわけ平和研究面での協力関係の発展について強調しました。

（翻訳：赤松敦子）

編集後記

この通信は、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン、山根和代、安斎育郎、キヤ・キムによって編集されました。

また日本語版の翻訳は、赤松敦子さん、寺沢京子さん、山本美穂子さんが担当しました。この通信は、INMP の個人と組織をつなぐ重要な場です。また INMP の会員ではない方が世界の平和博物館の活動を知る上で、大変重要です。

以前発行された通信は INMP の新ウェブサイトで読むことができます。

http://tinyurl.com/INMPMuseumsForPeace/

INMP の通信は年に 4 回発行されますが、定期的に読みたい方は、メールアドレスを次のメールにお知らせ下さい。inmpoffice@gmail.com

2019 年 6 月に発行される次号に投稿したい方は、2019 年 5 月 15 日までに原稿をお願いします（英文で 500 語以内、日本語の場合 1000 字以内、写真 1-2 枚）。直接英語による原稿を書くことに困難がある場合には、以下の INMP 日本事務局にご相談ください。

inmpoffice@gmail.com

事務局からのお知らせ

INMP の会費と寄付のお願い

「平和のための博物館国際ネットワーク」（INMP）の財政はみなさまの会費と寄付によって成り立っています。

私たちは 2020 年 9 月中旬に第 10 回国際平和博物館会議を京都と広島で開催する予定ですが、その成功のためにもしっかりとした財政基盤を築く必要があります。

これまですでに会費を支払った方は感謝申し上げます。まだの方は、よろしくお願いします。